

監修

高木市之助

久松潛一

山岸徳平

小島吉雄

源氏物語

五

池田龜鑑校註

監修

高木市之助

山岸徳平

久松潛一
小島吉雄

源氏物語

五

池田龜鑑校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書

「源氏物語」五 池田龜鑑校註

昭和二十九年一月十日初版發行

昭和四十八年五月三十日第十五刷發行

印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田區

有樂町・大阪市北區中之島・北九
州市小倉區砂津・名古屋市中區榮

定價五四〇圓

池田龜鑑（いけだきかん）

明治二十九年鳥取縣生。昭和三十
一年歿。東京大學國文學科卒業。
東京大學教授。主著—宫廷女流日
記文學、古典の批判的處置に關す
る研究、源氏物語大成等。

1391-210005-0042

目 次

凡 系 本 夕

例

圖

文

霧

夕

一、夕霧一條の宮に接近、御息所もまた夕霧に親しむ	一、夕霧ものに紛れて宮に近づく	四
二、御息所病氣、小野の山莊に移る	一二、侍女狼狽、夕霧動かす	五
三、御息所夕霧の好意に謝意をのぶ	一三、夕霧宮をとどめてかき口説く	五
四、夕霧、仲秋の小野に落葉宮を訪ふ	一四、山莊の秋の夜、夕霧の心緒亂る	七
五、夕霧、宮の部屋の前に坐す	一五、落葉宮煩悶、夕霧切に哀訴す	七
六、夕霧侍女の少將の君に訴ふ	一六、夕霧、月光にぬれて落葉宮と語る	八
七、落葉宮侍女を介して夕霧と語る	一七、夕霧、一夜を無爲に明かす	九
八、暮色深くあはれを添ふる山莊	一八、和歌を唱和して山莊を出づ	九
九、夕霧、落葉宮と和歌を贈答す	一九、夕霧先づ六條院の花散里を訪ふ	三
一〇、夕霧泊らむとして從者に指圖す	二〇、落葉宮浮名の立たむことを煩悶す	三

目

次

- 一二、律師夕霧のことを御息所に告ぐ……………三
 一三、御息所小少將を召して眞相を質す……………三
 一四、落葉宮母君の傳言を聞いて惱む……………三
 一五、落葉宮煩悶、母君の前に參る……………三
 一六、御息所常の作法にて宮を迎ふ……………三
 一七、母子對面の折夕霧より懸想文……………三
 一八、御息所病をおして夕霧に返書す……………三
 一九、自邸における夕霧と雲井雁……………三
 二〇、小野よりの返書、雲井雁うばふ……………四
 二一、夕霧終夜不安、雲井雁別に疑はず……………三
 二二、夕霧小野よりの文を求むれど得ず……………四
 二三、夕霧、小野への返事を案す……………三
 二四、夕霧御息所の文を發見して嘆息す……………三
 二五、夕霧御息所に返書す……………哭
 二六、小野の宮母子の悔恨悲嘆……………哭
 二七、御息所の病狀急變、加持祈禱……………哭
 二八、御息所興奮のあまり頓死……………哭
 二九、落葉宮悲嘆、母君と共に死なむとす……………吾
 三〇、弔問客參集、朱雀院よりの消息……………吾
 三一、葬送の準備、夕霧宮に參上……………空
 四二、夕霧ねんごろに弔意をのぶ……………三
 四三、宮答へず、侍女等その由を夕霧に傳ふ……………吾
 四四、夕霧莊園に命じ葬儀を扶持せしむ……………吾
 四五、晚秋の小野、夕霧懇ろに訪ふ……………吾
 四六、雲井雁夕霧と和歌を贈答す……………吾
 四七、夕霧宮に對して積極的に出でむとす……………吾
 四八、晚秋の洛北、あはれことに深し……………老
 四九、夕霧山莊に至り少將の君と語る……………九
 五〇、落葉宮の傳言、夕霧小野を辭す……………三
 五一、夕霧月光の一條宮前をよぎる……………三
 五二、雲井雁夫の行跡をなげく……………六
 五三、夕霧小野への消息を認む、雲井雁の心情……………六
 五四、少將の君宮の手すさびを盜みて夕霧に與ふ……………空
 五五、源氏夕霧の噂を聞きて憂慮す……………空
 五六、源氏夕霧に面會の序宮の事を探る……………空
 五七、故御息所の法事、致仕大臣の心中……………空
 五八、朱雀院落葉宮の上を悲しむ……………空
 五九、夕霧宮を一條宮に移らしめむとす……………空
 六〇、落葉宮歸邸を拒む、大和守說得す……………空

- 六一、宮悲しみのあまり和歌を詠ず……………究
 六二、宮泣く泣く車に乗りて山莊を出づ……………究
 六三、世人夕霧と宮との關係を知らず……………七〇
 六四、夕霧宮に參り先づ少將の君に語ふ……………七一
 六五、夕霧突如闖入、宮塗籠に避く……………七二
 六六、夕霧、六條院なる花散里を訪ふ……………七三
 六七、花散里雲井雁のために辯ず……………七四
 六八、源氏夕霧と對面するも意見せず……………七五
 六九、三條邸における夕霧と雲井雁……………七六
 七〇、夕霧雲井雁をなだめおきて出づ……………七七
 七一、夕霧切に宮に口説けど甲斐なし……………七八
 七二、小少將塗籠に夕霧を導く……………七九
 七三、夕霧終夜口説くも宮従はず……………八〇
 七四、夕霧一條宮に泊りて宮にあふ……………八一
 七五、その翌朝の一條宮の模様……………八二
 七六、雲井雁夕霧に絶望して父の許に歸る……………八三
 七七、夕霧致仕大臣邸に雲井雁を訪ふ……………八四
 七八、夕霧今のはらの立場を苦慮す……………八五
 七九、藏人少將致仕大臣の使者として一條宮を訪ふ……………八六
 八〇、少將端然として父の意を傳ふ、宮わづかに答ふ……………八七
 八一、藏典侍雲井雁に同情の歌をおくる……………八八
 八二、夕霧の子女すべて十二人……………八九

御

法

- 一、紫上重應、出家を希望源氏許さず……………九〇
 二、紫上の發意にて法華經供養の準備……………九一
 三、經供養、紫上明石上と和歌贈答……………九二
 四、終夜奏樂に賑ふ、紫上の哀愁……………九三
 五、死の豫感、人々と名残を惜しむ……………九四
 六、紫上、花散里と和歌を贈答す……………九五
- 一〇、紫上幼き匂宮を慈しみて遺言……………九六
 一一、秋に入る、紫上衰弱、容色更に美し……………九七
 一二、萩の露に譬へて源氏中宮と唱和……………九八

- 幻
- 一三、紫上危篤に陥り翌朝逝去……………先
 一四、夕霧を召し紫上落飾の事を依頼……………[10]
 一五、夕霧、僧をよびて用意せしむ……………[10]
 一六、源氏父子灯をかかげて死者を見る……………[10]
 一七、悲痛を抑へ源氏自ら葬送の準備……………[10]
 一八、葬送の日源氏悲しみを自制しえず……………[10]
 一九、夕霧野分の日を偲び紫上を戀ふ……………[10]

- 一、源氏春愁深し、蟻兵部卿宮來訪……………[10]
 二、女房等悲しみの中にも源氏に仕ふ……………[11]
 三、婦人關係を反省、雪の曉を追想す……………[11]
 四、親しき女房等にわが宿命を語る……………[12]
 五、紫上の形見に中將君をいつくしむ……………[12]
 六、源氏蟄居、憂悶の日を送る……………[12]
 七、匂宮形見の紅梅を賞づ、源氏感傷……………[12]
 八、春日遅々、源氏幼き匂宮に慰む……………[12]
 九、入道宮を訪ふにつけ故人を追慕……………[12]
 一〇、明石上を訪ひ故人を思ふ、明石上出家を
 謎む……………[12]
- 一一、藤壺を語り深更明石上の許を辭す……………[10]
 一二、翌朝明石上に消息、紫上を追想す……………[11]
 一三、花散里消息、裝束を贈つて慰問す……………[11]
 一四、祭の日葵につけて中將の君と唱和……………[12]
 一五、五月雨の夜夕霧を召し孤獨を語る……………[12]
 一六、一周忌近づく、夕霧と諸事を談合……………[12]
 一七、時鳥ほのかに鳴く、父子唱和……………[12]
 一八、夕霧宿直して紫上在世當時を回想父の悲
 傷を思ふ……………[12]
- 一九、盛夏、風物につけ故人を戀ふ……………[12]
 二〇、七夕、絶ゆる期なき長恨を歌によす……………[12]

- 一一、一周忌法要、中將君と歌の贈答……………二七
 一二、重陽の朝、菊の綿を見る傷心……………二八
 一三、冷雨薰條、空行く雁の翼を羨む……………二九
 一四、豊明節會諸人來訪、筑紫五節を偲ぶ……………三〇
 二五、出家の準備—人々に形見を與ふ……………三一
 二六、故人の文反故を破りて焼く……………三二
 二七、御佛名、退出の導師と唱和……………三三
 二八、歲暮、追懺に興ずる若宮の童心、源氏の哀傷…三四

雲隱

- 勾宮……………三五

- 一、源氏薨後八年、勾宮と薰君並び稱せらる……………一四
 二、當帝の女一宮と二宮との動靜……………一五
 三、夕霧、姫君の結婚に配慮、勾宮の意すすます……………一五
 四、花散里、女三宮、明石中宮、雲井雁、落葉宮の動靜……………一六
 五、明石上の動靜、夕霧紫上を追慕してやまず……………一七
 六、天下をあげてなき源氏と紫上を慕ひ寂寥を感じず……………一七
 七、冷泉院秋好中宮、薰を寵遇、薰中將となる……………一八
 八、女三宮薰に頼る、薰雲上の人氣を集む……………一九
 九、薰身の出生につき懷疑懊惱す……………二〇
 一〇、帝中宮、薰を慈しむ、夕霧また厚遇……………二一
 一一、源氏の一生を回想、薰の人柄と比較—作者の評……………二二
 一二、競ふ薰中將の袖……………二三

紅梅

一、紅梅大納言の近況とその後妻眞木柱の性格

八、大納言紅梅につけて匂宮に消息す

七、九、匂宮大夫の君を語らひ紅梅をめづ

六

二、姫君三人の近況、大君東宮に參る

五、五、匂宮に消息す

五

三、匂宮紅梅の中君を所望す、大君寵を受く

三、三、匂宮に消息す

三

四、中君宮の君と親しむ、大納言の配慮

二、二、匂宮に消息す

二

五、大納言宮の君の聲をききその容姿をゆか

一、一、匂宮に消息す

一

しがる

一、一、匂宮に消息す

一、一、匂宮に消息す

一

六、大納言しきりに宮の君の琴を所望

四、四、匂宮に消息す

四

七、大納言若君に、笛を吹かしめ庭前の紅梅

三、三、匂宮に消息す

三

竹河

一、この物語の序—紫上の直傳ならぬ由のことわり

一、一、匂宮に消息す

一

二、毘黒薨後の玉鬘とその生活

四、四、匂宮に消息す

四

三、玉鬘、姫君の入内につき躊躇す

三、三、匂宮に消息す

三

四、冷泉院玉鬘にその大君を懇望

二、二、匂宮に消息す

二

五、藏人少將大君を熱望、玉鬘承引せず

一、一、匂宮に消息す

一

六、玉鬘、源氏の形見として薰に親しむ

一、一、匂宮に消息す

一

十四

七、元日頃玉鬘の兄弟、夕霧父子等來訪

六

八、玉鬘大君の參院につき夕霧と懇談す

九

九、一同三條宮に赴く、玉鬘の子息同行

十

一〇、蒸おくれて玉鬘邸に來訪

十一

一一、薰、宰相の君と和歌をよみかはす

一二、玉鬘、薰を賞で亡き源氏を追慕す

十三、薰、玉鬘邸を訪ひ、藏人少將に遭ふ

十四

十五

一四、玉鬘和琴に亡父と柏木を偲ぶ	一七	三三、薰參院、大君に未練の心あり	一九
一五、薰、少將藤侍從らの小宴、玉鬘もてなす	一七	三四、少將落膽甚しくして玉鬘ならびに院に疎	一九
一六、藏人少將薰を羨み我身をわぶ	一七	隔す	一九
一七、玉鬘、薰の手蹟を賞づその子息達を訓戒	一七	三五、帝の不満中將しきりに母玉鬘を責む	一九
一八、玉鬘の二女とりどりに美し	一七	三六、大君懷妊院慰めに明暮音樂の合奏	一九
一九、中將父を偲び妹姫の幼時を語る	一七	三七、男踏歌院に參る、薰藏人少將參加	一九
二〇、大君の參院に兄達反對東宮を勧む	一七	三八、薰、院に召され、大君の女房と語る	一九
二一、藏人少將夕霞の紛に姫君を垣間見る	一九	三九、冷泉院、大君薰と合奏す、薰ひそかに大	一九
二二、姫君等甚の勝負に寄せて櫻の鼓詠	一九	君を思ふ	一九
二三、院なほ大君を懇望、玉鬘つひに受諾す	一八	四〇、大君姫宮を生む、玉鬘滿足、院の寵愛い	一九
二四、藏人少將母を責めて猶大君を諒めず	一八	よいよ加はる	一九
二五、藏人少將薰の文を見て我身を歎く	一八	四一、玉鬘大君を案ず、勅許により中君に尙侍	一九
二六、藏人少將中將の君に心中を訴ふ	一八	を譲る	一九
二七、夕霧夫妻少將に同情、少將歌を贈る	一八	四二、夕霧の諒解、中君尙侍として參内す	一九
二八、中將、玉鬘に少將の心を傳ふ	一八	四三、玉鬘參院を憚る、院、大君ともにそれを恨む	一九
二九、大君院に參る、夕霧夫妻玉鬘に好意をよ	一八	四五、大君皇子を生む、世評悪く玉鬘後悔	二〇
す	一九	四六、藏人少將中將に昇進、猶大君を慕ふ	二〇
三〇、大君少將の文に返歌す少將の感慨	一九	四七、大君世を憚り里がち、中君却て幸福	二〇
三一、少將より哀訴の返歌、大君後悔す	一九	三二、大君參院す、寵幸めでたし	二〇
三三、大君參院す、寵幸めでたし	一九	四八、夕霧以下昇進、薰玉鬘邸に挨拶に參上	二〇

橋

姫

- 一、桐壺帝第八皇子不遇にて北方と暮す……………二〇八
 二、姫君二人誕生、北方逝去……………二〇九
 三、八宮悲歎の中に二人の姫君を愛育……………二一〇
 四、姫君達とりどりに美しく成長す……………二一〇
 五、邸内荒廢、宮北方を偲びて寂寥の日々を
 送る……………二一〇
 六、八宮佛事に専念、再婚の勧をきかず……………二一〇
 七、八宮姫君達の性格を觀察……………二一〇
 八、八宮池の水鳥を見て悲しむ……………二一〇
 九、姫君達幼少、水鳥の歌を書く……………二一〇
 一〇、八宮幼き姫君に琴を教ふ……………二一〇
 一一、八宮の性格現實に疎く音樂に長ず……………二一〇
 一二、八宮の閱歴、其後世に交らず……………二一〇
 一三、宮邸火災に遭ふ、宇治川の邊に移る……………二一〇
 五一、玉鬘薰に大君の不運を訴へ助力を懇請す……………二〇三
 五〇、薰、玉鬘の憂慮を否定これを説得……………二〇四
 五一、薰の心づかひ、玉鬘その人品態度をめづ……………二〇五
 五二、紅梅、姫君の婿に匂宮薰を志す……………二〇六
 五三、玉鬘、紅梅邸の繁榮に比し感慨無量……………二〇六
 五四、玉鬘藏人少將に比し我子の上を歎く……………二〇六

二八、姫君達静かに奥に入る薰感歎す	三六	四二、宇治より返信、薰重ねて訪はんとす	三六
二九、薰侍をして姫君達に來意を通せしむ	三七	四三、薰匂宮に宇治の姫君の事を語る	三七
三〇、姫君達狼狽、薰簾の前にて挨拶す	三七	四四、匂宮宇治に心を惹かる薰の心境	三八
三一、薰、大君に心情を語り交誼を懇願	三八	四五、十月のはじめ薰再び宇治を訪ふ、八宮觀 ひ迎ふ	三九
三二、辨の君起出でて薰に挨拶	三九	四六、八宮薰の懇願にて琴を弾く	四〇
三三、辨薰に柏木との縁故を語りて泣く	三九	四七、八宮姫君達に琴を勧む二人聽かず	四一
三四、薰人目を憚り辨に再會の折を約す	三九	四八、八宮姫君達を案ず、薰後見を約す	四一
三五、薰姫君達に同情、大君に返歌す	三九	四九、薰辨の君より出生の秘密を聽く	四二
三六、夜次第に明け行く、薰西面にて物思ひに ふける	三九	五〇、辨秘密保持の苦心を語り薰との邂逅をよ ろこぶ	四三
三七、薰宇治の柴舟に世の無常を思ふ	三九		
三八、薰大君と唱和、再會を約して歸京す	三九		
三九、薰歸京して宇治の姫君と辨に消息をつか はす	三九		
四〇、薰山寺にも消息す、篤く僧達に布施	三九		
四一、宿直人薰より貰ひたる衣の香に困す	三九		
本	四八		

一、匂宮の初瀬詣で、諸人競うてこれに從ふ

四六

二、夕霧宇治の山莊に匂宮を迎へんとす

四六

三、宇治山莊の歓待、音樂の合奏

四九

四、八宮はるかに樂の音を聞いて懷舊す

四九

- 五、八宮より薰に消息、匂宮代りて返事 二三〇
 六、薰人々と八宮に參上す八宮の歎待 二三一
 七、匂宮八宮に消息、八宮中君をして返書せしむ 二三二
 八、匂宮の一行歎を盡して歸京す 二三三
 九、匂宮常に宇治に消息す中君返書 二三四
 一〇、八宮の春愁、姫君達の上を案ず 二三五
 一一、八宮出家を志しつつなほ姫君達の行末を思ふ 二三六
 一二、薰任中納言、亡父柏木をしのび佛道に志す 二三七
 一三、薰宇治宮を訪問す、八宮姫君達のことを依頼 二三八
 一四、八宮、薰に向ひ昔物語に託して姫君達の身の上を憂ふ 二三九
 一五、八宮薰の懇望により姫君に彈琴を勧む 二四〇
 一六、八宮薰に依頼して退席せんとす、薰援助を誓ふ 二四一
 一七、薰姫君達と語る、匂宮の性格と比較して反省す 二四二
- 一八、薰匂宮それぞれ宇治訪問を計畫 二四三
 一九、八宮山寺參籠を決意、姫君達に遺言す 二四四
 二〇、八宮參籠の前日姫君達の將來につき侍女等に訓戒 二四五
 二一、八宮姫君達を慰めて山莊を出づ、姫君達相睦ぶ 二四五
 二二、八宮罹病阿闍梨下山をいさむ 二四五
 二三、八宮死去の報いたる、姫君達後を追はんと歎く 二四五
 二四、姫君達亡父宮を戀ひ阿闍梨を恨む 二四五
 二五、薰八宮の訃音に哭く、懇ろに弔問たに念佛す 二四五
 二六、宇治山莊の晚秋、姫君達傷心して父宮のせしむ 二五六
 二七、匂宮宇治に弔問の消息をなすも返事なし 二五六
 二八、忌明けて匂宮より消息、大君中君に返歌せしむ 二五六
 二九、匂宮より使來る、大君の返歌 二五六
 三〇、匂宮の使者急遽歸參、匂宮返書に見入る 二五六
 三一、匂宮より再度來信、姫君達なほ自重せんとす 二五六

三二、薰宇治を訪ふ、姫君と直接対話せんこと を懇望	二九
三三、大君わづかに應答、薰と唱和	二七
三四、辨の君今昔を語る、薰心情を訴へて泣く	二七
三五、辨の君の素姓、姫君達の後見	二七
三六、薰故宮を悲しむ、雁鳴いて渡る	二七
三七、匂宮姫君達の喩をきいて心を動かす	二七
三八、宇治の姫君達父宮なき後寂しく日々を送 る	二七
三九、年暮れんとして宇治の宮邸いよいよ寂寥 をきはむ	二七
四〇、姫君達山寺の阿闍梨のもとに綿衣などを おくる	二七
四一、歳暮、薰雪を冒して宇治を訪ふ、大君應 待	二七
四二、薰大君に匂宮の意向を傳ふ	二七
四三、薰事の序にわが意中を大君に打明く、大 君默す	二七
四四、薰辭去にあたり我が山莊に姫君を迎へた き意を仄めかす	二七
四五、薰例の宿直人を呼びて慰む	二八
四六、薰八宮の佛間を見る、宮の生前を回想し て悲傷	二八
四七、薰の莊園の者等引連れて來る	二八
四八、新年阿闍梨より芹蕨など贈り来る、姫君 達唱和	二八
四九、薰匂宮より新春の挨拶	二八
五〇、花の頃匂宮宇治に消息意中を示す、中君 返事	二八
五一、匂宮薰に姫君達への手引を責む	二八
五二、匂宮、夕霧六の君との縁談を辭退す	二八
五三、薰身邊急忙に紛れて宇治に無沙汰	二八
五四、暑中薰宇治に赴く、姫君達を垣間見んと す	二八
五五、中君立出づ、愛らしき容姿大やうなる性 格と見ゆ	二八
五六、大君ゐざり出づ、容姿品高く優雅、慎重 なる性格と見ゆ	二八

源
氏
物
語

五

池
田
龜
鑑

凡例

一、第一巻の巻首に附した凡例中、本巻にも關係する諸點を再録し、あはせて一二新しく氣のついた事をも附記することにする。

一、本文については、校異源氏物語の底本となつてゐる大島雅太郎氏藏の青表紙本に依り、他の同系統の諸本の本文を参考し、大島氏本自身の誤脱を訂正することによつて、定家所持本の再建に努めた。

一、河内本は註釋的意圖による校訂本文で、文意は通じ易いが混成した本文であるから、底本には比較的純粹な一系統線上にある青表紙本を採用し、専らこの系統線の内部を清掃しつつ溯上することに依つて、作者自身の原本に近づかうと努力した。

一、右青表紙本の再建に當つて、定家本自身に犯された誤謬と思惟すべきものは、河内本・別本などの諸本の異文を参考し、それらによつて誤謬の過程が説明し得られる場合には、これを訂正した。

一、本文校訂にあたつては、句讀點を施し、適當な漢字を假名に當て、假名遣ひを正して、読み易くし
た。漢字をあてる場合には、原則を設けて大體それに據つたが、なほその箇所の文字の配列などによ
り便宜に從つた所もある。